

日本人の習俗

暑い暑いと言いながら、暑くなくて夏ではありません。日本の夏は暑くてなんぼです。この暑さを味わい、感謝しながら日々を過ごしたいものです。さて、感謝と言えば、日本の夏には『お盆』があります。『お盆』には家族皆で墓参りをし、お寺で御先祖様を偲びます。その思いに共鳴して御先祖様が帰ってこられるという風習があります。日本に古くから伝わる『神道』と、伝来した『仏教』の関係について考えてみたいと思います。

神道は日本に古くからある民俗宗教です。「八百万」やおよろず無数の意の神」と表現されるほど、神様の数が多く、特定の人物や動物、植物のような生命体ではなく、山や川、月や太陽のような自然のものから、森羅万象、様々なものを神格化しています。その起源は紀元前200年ごろ（縄文時代）までさかのぼるといわれています。その中で最高神とされるのが天照大御神（あまてらすおおみかみ）です。

仏教は飛鳥時代（552年）に日本に伝来したと「日本書紀」に記されています。また聖徳太子の伝記である「上宮聖徳法王帝説（じょうぎゅうしやうとくほうおうていせつ）」を根拠に538年に伝来したとも伝えられています。

飛鳥時代に仏教が伝来し、朝廷は仏教を広めようとしています。仏教は神道との融合、調和をはかりながら長い年月をかけて、様々な宗派に分かれながら日本人の中に浸透していきました。

●お盆は日本の行事？

私達日本人にとって、一番馴染みのある仏教行事といえば、やはり「お盆」ではないでしょうか？

日本では推古天皇14年（606年）に孟蘭盆会（うらぼんえ）の記録が残っており、聖武天皇の時代には宮中の行事となったようです。孟蘭盆会は天皇の主催する国事ではありましたが、明治維新後の廃仏毀釈から宮中での仏教行事は廃止されました。その後は、一派大衆の間で、先祖崇拝と結びついた、『お盆』という国民の行事として定着していきました。『お盆』は古神道における先祖崇拝の儀式や神事に、仏教行事の「盂蘭盆」が集合して現在の形が出来たと考えられています。つまり、日本に伝来した仏教と、民間宗教が集合した行事と言えます。

日本には1年に2度、初春と初秋の満月の日に、祖先霊が帰って来られるという先祖信仰・先祖崇拝が、仏教伝来前からありました。初春のものが、祖霊の年神として神格を強調されて『正月の祭り』となり、初秋のものが、孟蘭盆と集合して、日本で一般的な『お盆』という仏教の行事として行われるようになったので

す。歴史を紐解くと、8世紀頃の日本では、夏に祖先供養を行うという風習が確立されたと考えられています。

今のインドでは見られませんが、『お盆』は元々、仏教の始まった当時のインドの「ウランバナ」という風習です。というわけで、日本の『お盆』は宗教というより習俗です。先祖を大切に思う気持ち、感謝の気持ちを表す行事です。

古代インドの「ウランバナ」という風習は、「盂蘭盆経」というお経の説話に基づいています。その内容はとやうと……？

今から2500年前に釈尊の十大弟子、神通第一の目連尊者（もくれんそんじや）の母の死後、餓鬼界（がきかい）で苦しんでいるのを見た目連尊者が、神通力で食べ物や母に供養するが、餓鬼界では炎に変わりました。困った目連尊者が釈尊に教えを請うたところ、教団の僧侶に食べ物や供養するように教えられました。目連尊者がお釈迦様に教えられた通りにすると、母親は餓鬼界から逃れることができ、無事に往生することが出来ました……。

この説話に基づき、日本の『お盆』に寺院で行われる施餓鬼会法要（せがきえほうじやう）と合わせて、お盆の目的である『先祖供養』が執り行われるようになりました。お釈迦様は、父母の恩を「親をおぼつて10年歩いて、その恩に報いることは出来ない」と親、先祖の供養を重要視されています。

●日本人の習俗としてのお盆

日本では、亡くなってから33年が経っていない霊魂を「荒御魂（あらみたま）」と呼んで、慰霊行事をします。お経を読み、追善供養をすることで、荒御魂は徐々に浄化され、33年くらい経つと、最終的には神になります。個性を失って非常に大人しい霊魂になるので、これを「和御魂（にぎみたま）」と呼びます。

お正月は和御魂になった御先祖様を家にお迎えして、皆で楽しく食事を頂くのがメイン行事です。一方の『お盆』は、荒御魂の段階の御先祖様をお迎えして皆で食事を頂きます。

また、『お盆』の準備は7月7日の「七夕」に始まります。「七夕」というのは、実は「精霊棚」を意味する言葉なのです。荒御魂の中でもとりわけ荒れている期間を「精霊」と呼んで、各自の家で精霊棚を作ってお祀りするわけです。「精霊」の期間については、一周忌あたりまでだと思つて頂ければ良いでしょう。7月7日に準備を始めて、13日に荒御魂である御先祖様をお迎えするので、旧暦で考えると、七夕とお盆がうまく合いますが、近年、お盆は8月なのに七夕は新暦の7月7日という場合も多く、七夕とお盆の関係が分からなくなってきたという現実もあります。

そしてお中元というのは、一族郎党が各地の名産品や食料を持ち寄って親元を集まり、御先祖様をお祀りして、一族の団結を高めていくためのものでした。お正月とお盆はワンセットの行事だと認識して頂ければ宜しいかと思えます。お正月には言わば、顔を見たいこともない御先祖様の霊が戻ってくるのですが、お盆には、可愛がってくれたお祖母さんや曾お祖母さんが戻ってきます。ですからお盆の挨拶は「結構なお盆で、おめでどうございませう」でした。お盆だからといって、しめやかにするわけではないのですね。ただし、去年のお盆から今年のお盆の1年間に亡くなられた方をお持ちの家は、まだ悲しみに沈んでいますから、「結構なお盆で、おめでどうございませう」と挨拶した後に「新盆で、おさみしゅうございませう」と付け加えるのがエチケットでした。

●神道の祖先崇拜について

日本では、死者の行く国について、山の中にあるという「山中他界」と、海の遙か向こうにあるという「海上他界」と2つの考えがあったようです。「山中他界」とは、山の中に御先祖様の霊が集まって山の神となり、春になると降りて来られ、田の神、農耕神になるという信仰です。「海上他界」とは、死者の国は海上の遙か彼方にあるとい

う信仰です。

この山中他界と海上他界という2つの考えが生まれたのは、縄文文化と弥生文化が関係しているのではないかと考えられています。縄文文化は狩猟採取経済ですから、やはり「山中他界」の信仰を持っていたと思われまます。対して、渡来人を中心とする弥生人が持ち込んだのが、「海上他界」の信仰だったのではないかと考えられています。以上のように、日本民族の持っている死後の世界観は、二系統ありました。精霊流しや、流し雛は「海上他界」の考え方。一方、地獄という考え方は「山中他界」の系統と言えます。

いずれにしてもお盆の行事は、仏教の行事ではあるものの、神道の行事としても考える事が出来ます。お正月とお盆をワンセットで考えるならば、「荒御魂」と呼ばれる仏様と、「和御魂」と呼ばれる神様を迎え、一族みんなで賑やかに、楽しんで喜び合う行事だという事をご理解いただけたのではないでしょう。

●御先祖様を偲び合掌する

『お盆』の成り立ちや意義を考えるにつけて、日本人の行事としての本質が明らかになってくるようです。

先祖が祖霊となって家や郷土を守って下さるという信仰が高まっていった、やがて田の神、山の神として田畑を守り、穀物を実らせてくれるという考え方になっていった事が分かりました。お正月や

お盆は、先祖祭りでもあります。私が「今」、「ここ」にいるのは、おびただしい数の父母、両親があつての結果で、その1つが欠けても「今」、「ここ」にいないのです。そう考えていくと、まさに御先祖様があつての今の「わたし」という事をつくづく感じます。この無量の縁に支えられて「在る」ということに感謝する気持ちを大切にしなければなりません。お正月やお盆、それに春、秋の両彼岸を、「御先祖をお参りする日」と定めて下さった昔の祖先達の智慧の深さには、驚きと共に、心からの敬意を表したいと思えます。今年も、8月16日には真成寺の本堂に結集して、皆様と一緒に、感謝の誠を捧げましょう。

合掌 副住職 谷川寛敬 拝

